

韓国仏国寺の無垢陀羅尼經

【スクープ】韓国木版印刷物は世界最古じゃなかった？

朝鮮日報（二〇〇七年三月九日）

「世界最古」の無垢陀羅尼、日本の百万塔陀羅尼經より新しい可能性

世界最古の木版印刷物として国史（韓国史）教科書にも掲載されている「無垢淨光大陀羅尼經」が、新羅時代（八世紀初めから七五一年以前）のものではなく、高麗初期（十一世紀前半）のものであることを示す史料が発見された。

これは、一九六六年に仏国寺釈迦塔の二層目の舍利函から「無垢淨光大陀羅尼經」とともに発見された「釈迦塔重修記（修理記録）」が最近判読され、この重修記「無垢淨光大陀羅尼經」が十一世紀に作られたことを証明する内容が記録されていたため。従って、世界最古の木版印刷物は、日本の「百万塔陀羅尼經」（七七〇年）になる可能性が高まり、関連学会には衝撃が走っている。

「釈迦塔重修記」は「太平四年（一〇二四年）三月仏国寺無垢淨光塔重修記」という題名で始まり、「巻物状の無垢淨光大陀羅尼經と（もう一つの）無垢淨光大陀羅尼經（の二点）を塔の中に収めた」と記録されている。また、無垢淨光大陀羅尼經以外にも、「宝きよう印陀羅尼經」や、舍利数点、各種の香（こう）数十点、庫裏に金メッキを施した〇〇（欠字）、金製の瓶なども収めら

れたと記されている。このうち各種の香や金銅製品などは一九六六年に釈迦塔から発見され、「宝きよう印陀羅尼經」は最近判読に成功した「墨書紙片」に釈迦塔重修記とともに存在することが確認されている。

「墨書紙片」とは、六六年の釈迦塔調査の際、モチのように固まった状態で発見された一一〇枚余りに上る紙片のことを指しており、これまでは内容不明として扱われてきた。そこで、九〇年代初期に国立中央博物館がこの「墨書紙片」を判読し、保存処理を行おうと試みたが、「重修記」という文字を判読しただけで作業はストップしてしまった。

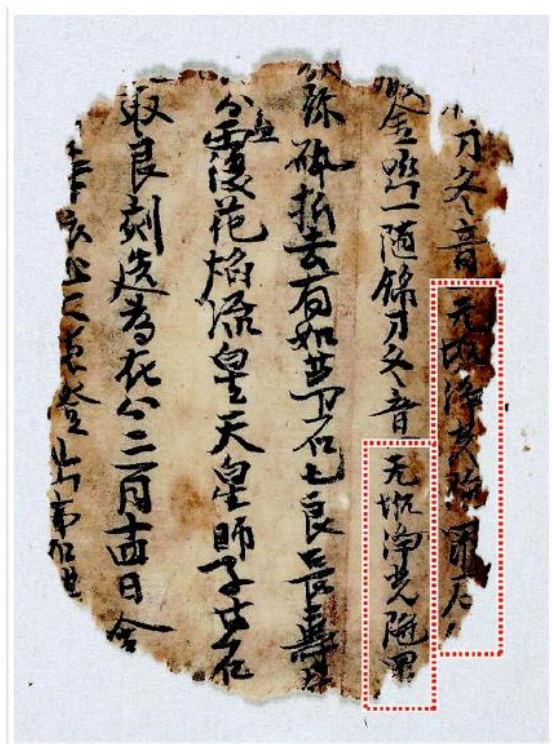
しかし、二〇〇五年に重修記の存在がマスコミに知られると、博物館は「パンドラの箱」と呼ばれる「墨書紙片」の本格的な判読作業に取り組み始めた。これまで釈迦塔は七五年の創建以来、重修（大規模な修理・補修）をしたことがないと認識されていたため、その判読作業は韓国史を後退させる可能性もあるデリケートな作業だった。

そして、国立中央博物館側は最近、「重修記そのものはまだ公開することができない」とし、判読文だけを本紙に独占提供した。本紙は、この漢文で書かれた判読分の解釈を高麗大の金彦鍾（キム・オンジョン）教授（漢文学）に依頼した結果、「無垢淨光大陀羅尼經」が世界最古の木版印刷物ではない可能性が高いことが分かった。

この判読結果について、国立中央博物館のオ・ヨンソン学芸研究士は「塔の創建時に収められた「無垢淨光大陀羅尼經」を高麗時代に補修し、「元どおりに収め直した」とも解釈することができる。

「無垢淨光大陀羅尼經」が新羅時代のものである可能性は依然として残っている」と主張した。
 しかし、匿名を希望するある文化財委員は「金銅製の舍利外函や銀製の舍利函など、釈迦塔創建時に収められたことが明らかな遺物は重修記に記されていない。重修記に記された遺物は高麗時代のもものと見るのが論理的」と指摘した。

慎亨浚（シン・ヒョンジュン）記者（文化部）



【「ラム」世界最古とされてきた「無垢陀羅尼經」の真実】

朝鮮日報（二〇〇七年三月一二日）

「無垢淨光大陀羅尼經が高麗時代のものかもしれない」という本紙の報道は戸惑いをもって受けとめられたことだろう。これまでずっと「世界最古の木版印刷物」として教科書に載せられてきただけに、なおさらのことだ。それは記者も同じだった。

一〇二四年に記録された「釈迦（しゃか）塔・重修記（修復記録）」に「無垢淨光大陀羅尼經を収めた」との記述があることを知ったのは、半月ほど前のことだ。その話はある文化財に関する専門家から知らされた。その専門家は「残念なことだが、事実は事実として明らかにするしかないだろう」と語った。

何日か悩んだ揚げ句、小学校の教科書で習った「ペンの力」という話を思い返しながら、取材を開始した。その話とは、第一次世界大戦下の英国で、新聞社の中で唯一「デーリーメール」紙だけが、「戦況は英国に不利だ」という事実を何度も報道したという逸話だ。これには「敵を利するもの」という非難が殺到した。だが前線から帰還した負傷兵を通じて「実際の戦況」が明らかになり、英国政府は兵器改善などを急ぎ、その結果連合軍は勝利した。戦争が終わった後、ドイツ皇帝のヴィルヘルム二世は「わたしはデーリー・メールという新聞のせいで負けた」と語った。

今回の報道に対する反応は予想通りだった。インターネットでも非難する声のほうが多かった。中央博物館の関係者も、困惑を隠せないでいる。大統領府広報主席室からは「なぜ朝鮮日報だけ

に資料を提供したのか」とし、経緯を書面で説明するよう指示があったという。

中央博物館が九日に発表した報道資料には、無垢浄光大陀羅尼經の製作時期に関して何の言及もなかった。ただ「一〇二四年に釈迦塔を修復した際、無垢浄光大陀羅尼經を安置したことを重修記から確認した」とだけ記されていた。

一部のメディアは「重修記をきちんと解読すれば、無垢浄光大陀羅尼經は釈迦塔を建立した際（西暦七五一年）に安置され、その後高麗時代に補修工事を行った際に入れ直したことがわかる」と報道した。しかし一九六六年に釈迦塔仏舍利藏置が発見された時の状況をよく知っている専門家たちは「説得力のない話」と一蹴（いっしゅう）した。

釈迦塔からは無垢浄光大陀羅尼經だけでなく、仏舍利を収めた舍利瓶や銀製の内箱・外箱、金銅製の舍利箱など、新羅時代に収められたことが明らかな「舍利藏置の重要部分」が発見された。しかし舍利や「随錦台」など釈迦塔の中に収められた遺物の目録を詳細に記した重修記には、こうした「舍利藏置の重要部分」に関する記述がない。そのため、重修記に記録された収蔵品は釈迦塔を補修した高麗時代に収められたと見るべきだろう。

現時点でもっともよく状況を把握している中央博物館が、公式資料の中で無垢浄光大陀羅尼經の製作時期に全く言及できないでいるのも、こうした理由があるからだ。中央博物館は、釈迦塔重修記はもちろん、釈迦塔重修記と一緒に発見された別の釈迦塔の修復記録である「形止記」（一〇三八年）など、釈迦塔から発見された約一一〇片に及ぶ「墨書紙片」もまだ全面的には公開していない。公開されたのは三〇余片に破れた「重修記」の中の二片にとどまっている、



中央博物館の苦しい立場を理解できないわけではないが、だからといっていつまでも「パンドラの箱」を閉めておくわけにもいかない。今からでも専門家らにすべての資料を公開し、共同研究を行うべきではないのか。「結果的に歪曲（わいきょく）された可能性のある神話」ではなく、「事実」を知らせるのが道理だ。もちろん共同研究を通じ、無垢浄光大陀羅尼経が新羅時代に製作されたものと判明すれば、それはそれで素晴らしいことだ。

慎亨浚（シン・ヒョンジュン） 記者（文化部）

【萬物相】 仏国寺釈迦塔の秘密

朝鮮日報（二〇〇七年四月一日）

一九六六年九月、仏国寺の泛影楼の補修工事をしていた現場監督が釈迦塔の前を通った際、三カ所にひびが入っているのを発見した。仏国寺側は地震が原因と発表したが、文化財委員らが調査したところ、盗掘犯の仕業であることが判明した。

その後、盗掘犯の一味は直ちに逮捕され、釈迦塔は解体修理されることになった。新羅・景德王一〇年（七五一年）の仏国寺創建とほぼ同時期に建てられた釈迦塔は、このようにしてその内部が世に知られることになった。

一ヶ月後、釈迦塔が解体され、二層目の中から金銅製の舍利函と香木、曲玉などが発見された。特に舍利函から発見された「無垢浄光大陀羅尼經」が注目を集めた。縦八センチ、横六二〇センチの韓紙（朝鮮紙）の巻物に印刷されたこの經典は、唐の則天武后代（六九〇―七〇四年）にのみ使用された特殊な字体で書かれていた。そのため、八世紀初めに製作された世界最古の木版印刷物であることが判明した。

発見された遺物はこれだけではなかった。一つに固まった紙の塊と何かを絹に包んだものも発にされた。しかし、当時の文化財保存技術では、一二〇〇年前の古紙に手を触れることはできなかった。比較的状态が良好な陀羅尼經ですら、日本の専門家に保存処理を依頼しなければならなかった。そのため、この紙の塊に対しては、一枚一枚分離し温度・湿度を最適な状態に保つ応急

措置が九七年になってようやく取られただけだった。一方、絹に包まれた物体も、X線で撮影し、中身が紙であるということだけを確認するだけにとどまった。

二〇〇五年、この紙の塊の中に「釈迦塔重修記」が存在するという事実が判明した。十一世紀初めに釈迦塔の大修理が行われていたことが明らかになると、釈迦塔遺物の製作時期に関心が集中した。この重修記の内容が最近判読され、陀羅尼経は新羅代ではなく、高麗初期に製作されたものと主張する声も上がった。つまり、「世界最古の木版印刷物」ではなくなる可能性もあるということだ。

その後、「陀羅尼経一点を塔の中に納めた」という記述の解釈をめぐり、激論が交わされた。また、ある専門家は「絹に包まれた物体がもう一つの陀羅尼経である可能性もある」と主張しており、釈迦塔遺物に対する関心は一層高まっている。

このあらゆる疑問を解決する責任は、釈迦塔遺物を四〇年間管理してきた国立中央博物館にある。技術が不足していた時期は仕方がなかったとしても、ここ一〇年間の国立中央博物館の振る舞いは理解しがたい。マスコミに事実が知られたので、しぶしぶ調査を行うかのような消極的な姿勢を見せているのだ。最も重要な重修記の内容についても、一年半以上解釈をせず放置したままだ。事なかれ主義がはびこる官僚体質が文化財管理にまで浸透したのだろうか。

李先敏(イ・ソンミン)論説委員